

チェックリストでチェック!

SRPのお悩み

☐ シャープニングしても適正なエッジがつかない原因がわからない	➡ お悩み1の原因1～4 (P.16～30)
☐ テスティングが苦手・自信がない、テストスティックを使っていない	➡ お悩み1の原因1 (P.16～20)
☐ ブレードの形態が先細りしてしまう、先細ったブレードの修正がわからない	➡ お悩み1の原因2 (P.21～24)
☐ シャープニングの角度設定に自信がない	➡ お悩み1の原因4 (P.27～30)
☐ スケーラーの管理方法がわからない	➡ お悩み1のコラム (P.32・33) ➡ お悩み3の原因3 (P.57)
☐ 探知用インスツルメントを使っていない	➡ お悩み2の原因1 (P.36)
☐ 探知に自信がない	➡ お悩み2の原因2～6 (P.37～48)
☐ 探知中に根面の引っかかりはわかるが、それが歯石かどうか判断できない	➡ お悩み2の原因6 (P.46～48)
☐ SRP後の残石を探知で見逃しやすい	➡ お悩み2の原因2～6 (P.37～48)
☐ SRP前・術中にデンタルエックス線写真を確認していない、または撮影していない	➡ お悩み3の原因4 (P.58～65)
☐ 検査のデータをSRPにどのように活かすのかわからない	➡ お悩み3の原因4 (P.58～65)
☐ 明らかに歯肉縁下歯石があることがわかっていても除去できない	➡ お悩み1の原因1～4 (P.16～30) ➡ お悩み3の原因1～3、5～10 (P.50～57、P.66～76)
☐ 硬い歯石が除去できない	➡ お悩み1の原因1～4 (P.16～30) ➡ お悩み3の原因1・10 (P.50～52、P.75・76)

このチェックリストは、自分自身でSRPにおける課題を整理するためのものです。当てはまる項目にチェックを入れ、その原因と解決策を示したページをご確認ください。複数の項目に当てはまる場合は、ページ順に読み進めることで、悩みの原因を整理しながら効率よく学ぶことができます。また、根本の原因が見つけれられると思います。さらに、習得の進捗状況の確認や、指導時の評価にも活用できるでしょう。

□ SRP後に指や手が痛くなる	➡お悩み1の原因1～4 (P.16～30) ➡お悩み3の原因1・10 (P.50～52、P.75・76)
□ 歯肉へのブレードの挿入に自信がない	➡お悩み3の原因2～5 (P.53～67)
□ どのスケーラーを使用すればよいかわからない	➡お悩み3の原因2～4 (P.53～65)
□ 歯石にエッジをかけるのが難しい	➡お悩み1の原因1～4 (P.16～30) ➡お悩み3の原因5・6・8 (P.66～68、P.70・71)
□ 遠心面のSRPが苦手	➡お悩み1の原因1～4 (P.16～30) ➡お悩み3の原因1～10 (P.50～76)
□ SRP時に患者さんに痛みを与えないかと心配になる	➡お悩み2の原因1～5 (P.36～45) ➡お悩み3の原因1～10 (P.50～76)
□ SRP終了の基準がよくわからない	➡お悩み2の原因1～6 (P.36～48) ➡お悩み3の原因4・6 (P.58～65、P.68)
□ SRP後の残石が多い	➡お悩み1の原因1～4 (P.16～30) ➡お悩み2の原因1～6 (P.36～48) ➡お悩み3の原因1～10 (P.50～76)
□ SRP後の再評価で歯周ポケットが改善しない原因がわからない	➡お悩み4の原因1～8 (P.78～86)
□ 再SRPを繰り返しても歯周ポケットの改善がない	➡お悩み4の原因9～13 (P.87～94)
□ SRPの習得のしかたがわからない	➡お悩み5の原因1 (P.96～101)
□ SRPの指導のしかたがわからない	➡お悩み5の原因2 (P.102～114)

段差はわかるが、 歯石かどうか判断ができない

根面を探知した際に段差や引っかかりを感じたとしても、必ずしも歯石であるとは限りません。歯石ではない段差の正体として、主に以下の4つが考えられます。

- CEJ (セメント-エナメル境)、根分岐部などの解剖学的な形態
- 根面う蝕

- 歯根破折やクラック、セメント質剥離
- 補綴装置のマージン

原因4(P.42)で述べたとおり、探知を行う前には、歯周組織検査の確認とエックス線写真の読影を必ず行います。そのうえで、探知時に「歯石かどうか迷った場合」の対策を以下に示します。

CEJ、根分岐部などの解剖学的な形態

CEJ

CEJは歯頸部に位置するため、エアーをかけて視診を行い、歯石の有無を確認します。さらに、CEJである場合は歯周ポケットが存在しないため、歯周組織検査も再確認します。CEJには形態のパターン⁵がいくつかあり、あらかじめ知識として把握しておくことが

判断基準の1つとなります(図2-16)。

根分岐部

歯周組織検査とエックス線写真を再確認し、ファークーションプローブを用いて計測することで、根分岐部病変の有無を評価します。そのうえで、解剖学的な形態を意識しながら歯石の探知を行います。

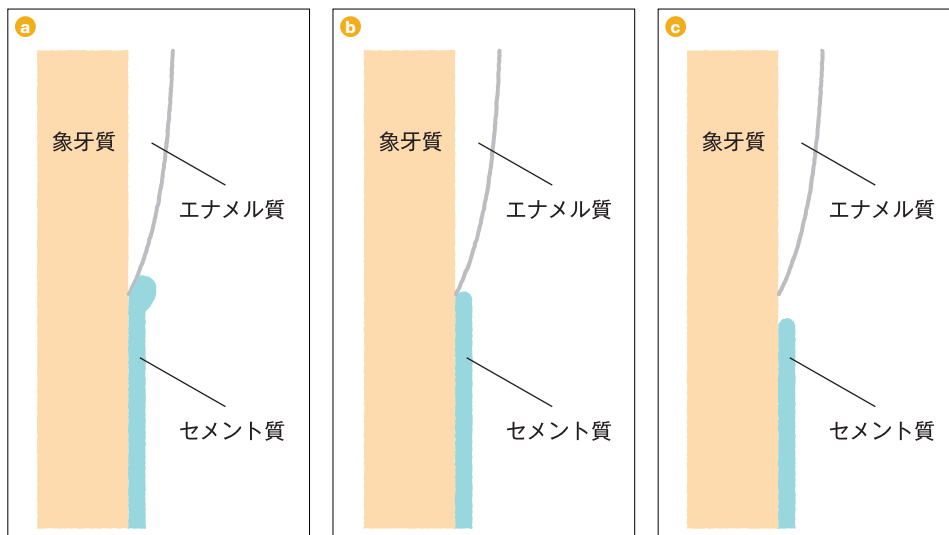


図2-16 CEJの形態分類

- a** セメント質がエナメル質を覆う型(約60%)
- b** 両者が一致する型(約30%)
- c** 象牙質が露出する型(約10%)

(文献5を参考に作図)

根面う蝕

エックス線写真で根面う蝕の有無を再度確認します(図2-17)。

歯周ポケットが存在する環境では根面う蝕が生じやすくなるため、歯周組織検査を再度確認します。

探知時に、根面に突出した段差ではなく、凹みを感じる場合は根面う蝕を疑います。この場合はSRPを行わず、歯科医師に報告します。

図2-17 根面う蝕



近心コンポジットレジン充填下に根面う蝕を認める。

歯根破折やクラック、セメント質剥離

ブローピング時に周囲の歯周ポケットと比べて一部のみに深い歯周ポケットを認めた場合、歯根破折(図2-18)やクラック、セメント質剥離を疑います。合わせて、その時点でのエックス線写真を撮影し、歯根破折やセメント質剥離(図2-19)を示す所見の有無を確認します。

エックス線写真上で明らかな所見が認められない場合には、垂直ストロークや水平ストロークで探知を行います。その際、突出した段差ではなく微細な引っかかりを感じる場合は破折やクラックを疑います(図2-20)。これらが疑われる場合はSRPを行わず、歯科医師に報告します。

図2-18 歯根破折

5は中央が破折しており、その部分のみ9mmの歯周ポケットを認める。



図2-19 セメント質剥離

- a エックス線写真で確認すると、1の近心にセメント質剥離が確認できる。
- b 視診でセメント質剥離片が認められる場合もある。

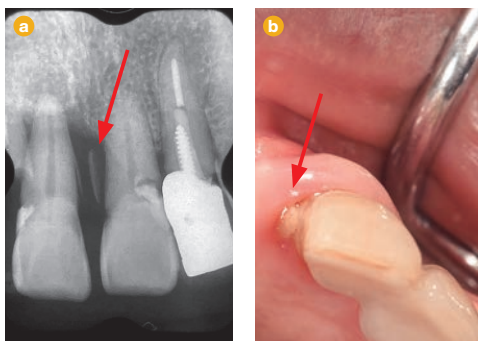


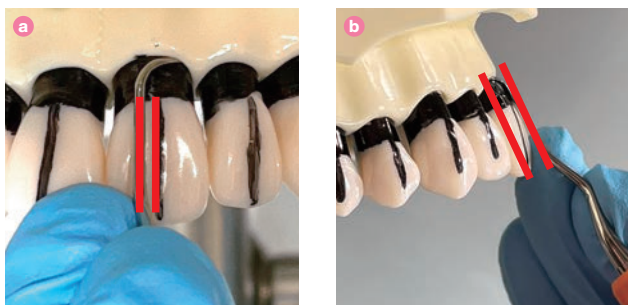
図2-20 クラック



クラック(矢印部)を探索すると微細な引っかかりを感じる。

第1シャンクの角度設定エラー

図3-37 第1シャンクの角度設定



近遠心の根面と第1シャンクだけでなく (a)、頬舌的な根面である歯根の根面と第1シャンク (b) も合わせる必要がある。

スケーラーのエッジが適切な角度で根面に当たることで、効果的に歯石を除去できます。そのためには、**スケーラーの第1シャンクを根面と平行に保つことが重要です。**このとき、近遠心的方向と頬舌的方向の両方から、第1シャンクが根面と平行になっているかを確認しましょう (図3-37)。

近遠心的な平行のみを意識している

動画でチェック



ブレードを挿入した角度のままモーションを行うと、頬舌的に第1シャンクが合わない。そのため、一度ハンドルを開いてからモーションを行うことで、第1シャンクと根面が平行となり、除石ができる。

根面と第1シャンクを近遠心的方向だけで平行に合わせてしまい、頬舌的方向の角度が十分に確認できていないことがあります。このエラーを防ぐためには、**第1シャンクと根面の関係を、近遠心的方向だけでなく、頬舌的方向からも確認する意識が必要です。**ただし、上顎前歯の頬舌的方向では、最初から第1シャンクを根面と平行に設定するわけではありません。歯肉にスケーラーを挿入し、ハンドルを起こした時点では第1シャンクはやや広めの角度になっており、その後モーションを行うなかで、第1シャンクが根面に平行になり、歯石を除去することができます。



スケーラーを歯肉に挿入した角度のまま、 第1シャンクの角度設定を確認しないで操作する

スケーラーを歯肉に挿入した時、その挿入角度のまま操作を開始してしまうエラーがよく見受けられます。特に、隅角部では術者の視線や意識が挿入動作に集中し、第1シャンクを確認せずにモーションに移行してしまいがちです。

このエラーを防ぐためには、歯肉への挿入後に一度視野を広げて、第1シャンクと根面の平行性を確認することが重要です。そのうえで、スケーラーのトゥ先約1/3のエッジが根面に適切に接しているかを確認してから操作に移るようにしましょう(図3-38)。

図3-38 第1シャンクと根面の平行性を確認する



① 歯肉に挿入した状態。② 視野を広げて第1シャンクと根面の平行の確認に意識を向けた状態。③ 歯肉縁下に挿入した後は、視野を広げて根面と第1シャンクの角度設定を行い、エッジが確実に根面に適合していることを確認してからスケーラー操作を行う。

臼歯部遠心を直視のみで確認している

上顎臼歯部遠心は直視だけで確認すると、第1シャンクが根面と平行に見えてしまうことがあります。しかし、ミラーを使用して第1シャンクと根面との位置関係を真横から確認すると、実際には近心方向へ傾いているケースが少なくありません。また、遠心面に対してスケーラーのエッジをどのように沿わせているかというイメージが不十分なまま操作すると、エッジが根面に適合せず、臨床では残石につながりやすくなり

ます。

このようなエラーを防ぐためには、**臼歯部の操作時には必ずミラーを使用し、真横から第1シャンクと根面の関係を確認することが重要です。**あわせて、ストローク中に指先へ伝わる感覚を頼りにしながら、頭の中で根面形態をイメージして操作することで、遠心面に対してエッジを適切に合わせることができます。(次ページ図3-39)。